

N y m p h é A r t # 1 4
ニンフェアール第14回公演

with Icarus Ensemble & Takeshi Kubota
イカルス・アンサンブルと窪田健志による

Italian & Japanese Contemporary Music
イタリア・日本の現代音楽

リバース
- *Rebirth* -

名古屋市千種文化小劇場

2018.11.11 (日) 17:00 開演

主催：ニンフェアール

助成：公益財団法人 朝日新聞文化財団

後援：イタリア文化会館

協力：村松楽器販売(株)

協賛：(株)こおろぎ社

楽器協力：名古屋音楽大学

==ご挨拶==

本日はお忙しい中、ニンフェアール第14回公演にご来場頂き、有り難うございます。2005年の第1回公演から毎年続けてこられましたのも、ご来場下さる皆様、ホール関係者、公演に関わって下さる方々の暖かいご支援の賜物であり、心からお礼申し上げます。

本公演では、過去の偉大な芸術家、アーティストからの引用、インスピレーションで書かれたイタリア人、日本人作曲家による作品に焦点をあて、伝統から未来につながる音楽の可能性を追求します。ラステッリの作品は、バッハの《ゴールドベルク変奏曲》(1742)、ロティリの作品は、モンテヴェルディのオペラのアリア《アリアナナの嘆き》(1607-08)、タリエッティは、14世紀の《モンセラートの失い本》、一柳慧の作品は、パガニーニの《24の奇想曲第24番》(1800-10)、山本哲也の作品は、エディット・ピアフの《バラ色の人生》(1946)、そして、伊藤美由紀の新作では、イタリア現代陶芸作家、カルロ・ザウリ(1926-2006)の《原始の復活》からのインスピレーションで書かれています。公演後、原曲となっている作品を是非とも聴きなおして、改めて作曲家の意図、想いに心を馳せて頂ければ幸いです。

愛知県を中心に国際的に活躍するピアニストの内本久美のイタリアで所属するイカルス・アンサンブル、名古屋フィルハーモニー交響楽団首席打楽器奏者の窪田健志、そしてゲオルギ・シャシコフ、岡田麗紗子の賛助出演による演奏で、イタリア、日本の個性的で魅惑的な音響を堪能して頂きたいと願っております。

2018年11月11日

ニンフェアール・伊藤美由紀

ニンフェアール

2005年愛知県で開催された国際芸術フェスティバル参加を機に結成。ニンフェとは、フランス語の睡蓮の意味で、ギリシャ語の乙女、蛹を意味するニンフとをかけており、アールは、フランス語でアートを意味する。美しく新鮮で、将来への可能性を秘めた芸術作品を名古屋で紹介する。ヴィオラ・ダモーレとリコーダーによるニンフェアール第1回公演『古楽器の現在』から始まり、愛知県にゆかりのある作曲家、演奏家を招聘し、テクノロジーの使用、映像作家とのコラボレーション、ユニークな楽器編成など、毎回、個性的なアイデアで企画。2014年第10回公演『東洋と西洋の絃』にて、チャレンジ精神に満ちた企画で且つ公演成果の水準の高い優れた公演に送られる、第14回佐治敬三賞を受賞。

来年度、2019年第15回公演は、『あいちトリエンナーレ 2019 舞台芸術公募プログラム』としてメキシコのオニックス・アンサンブル、佐藤紀雄(ギター)、木村麻耶(二十五絃箏)のメンバーにより、愛知県芸術劇場小ホールで9月23日(祝)に開催予定。

= Program =

1. **イヴァン・フェデーレ**：《モドゥス》(1988/95)バス・クラリネットと打楽器の為の
Ivan Fedele : *Modus* (1988/95) per clarinetto basso e percussionione
 2. **伊藤美由紀**：《空蟬》(2014)クラリネットとピアノの為の
Miyuki Ito : *Empty Cicada* (2014) for clarinet and piano
 3. **クラウディオ・ラステッリ**：《変容 第3番》(2017)フルートとピアノの為の (日本初演)
Claudio Rastelli : *Travestimento n.3* (2017) per flauto e pianoforte
 4. **一柳 慧**：《パガニーニ・パーソナル》(1982)マリンバとピアノの為の
Toshi Ichianagi : *Paganini Personal* (1982) for marimba and piano
- 休憩
5. **山本 哲也**：《...人生の色彩について》(2014) ヴィブラフォンの為の
Tetsuya Yamamoto : *...sur les couleurs de la vie* (2014) for vibraphone
 6. **パオロ・ロティリ**：モンテヴェルディ「アリアンナの嘆き」より《もう一つの響き》(2018)
フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴットとピアノの為の (日本初演)
Paolo Rotili : *Un'altra eco dal "Lamento d'Arianna" di C. Monteverdi* (2018)
 7. **ガブリエル・タリエッティ**：《意識のノート(1)》(2017)
フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴットとピアノの為の (日本初演)
Gabrio Taglietti : *Quaderno di traduzioni I* (2017) per quartetto di legni e pianoforte
 8. **伊藤 美由紀**：《原始の復活》(2018)フルート、クラリネット、打楽器とピアノの為の (世界初演)
Miyuki Ito : *Rebirth of a Primary* (2018) for flute, clarinet, percussion and piano (WP)

窪田健志 (打楽器) (1, 4, 5, 8)

イカルス・アンサンブル：

ジョヴァンニ・マレヅジーニ(フルート 3,6,7,8)、ミルコ・ギラルディーニ(クラリネット 1,2,6,7,8)、
マルコ・ベドラッツィーニ(ピアノ 3,6,7) (指揮 8)、内本久美(ピアノ 2,4,8)

賛助出演： ゲオルギ・シャシコフ(ファゴット 6,7)、岡田麗紗子(オーボエ 6,7)

==プログラムノート==

= 1部 =

1. イヴァン・フェデーレ：《モドゥス》(1988/1995)バス・クラリネットと打楽器の為の

《モドゥス》は、作品の旋律とハーモニーの要素、その音色環境を特徴づける“モダリテイ”を定義し核となる3音の音程の特別な秩序を意味する。作品制作の動機としての役割を担うこの冒頭の選択は、線的な構造によって一貫した手法となる。形式的な作曲の手法は以下の2点である。対立する特徴(叙情的-限想的な、活発で名人芸的な)の不変の対比と、再読、注釈、言換え、装飾を通して、作品の全体の枠を構成する部分を区別する変奏。作品は、バス・クラリネットとヴィブラフォンの2楽器により、注釈のような、素材の最後の統合された原型の中で反映された「コラール」セクションで終える。

イヴァン・フェデーレ(1953-) ミラノ音楽院とミラノ大学で哲学を学ぶ。彼の数学への情熱は、数学者である父親の影響で、空間化の概念の応用、創造的過程におけるライブラリーの組織化、グラニューラー・シンセサイザーの原型の定義を含む作曲におけるリサーチにおいて明らかである。ハーバード大学、バルセロナ大学、ソロボンヌ、IRCAM、シベリウス・アカデミー、ショパン・アカデミー、イタリアの各地の音楽大学などの重要な教育機関で熱心に教育活動を行ってきた。フランス芸術文化勲章(2000)、オネゲル国際作曲賞(2016)などを受賞。サンタ・チェチリア国立アカデミア(ローマ)のメンバーに任命(2005)、イ・ボメリッジ・ムジカリーの音楽監督(ミラノ)、ヴェネツィア・ビエンナーレの音楽監督も務めている。

2. 伊藤 美由紀：《空蟬》(2014)クラリネットとピアノの為の

蟬の抜け殻を、現世の人の身であるという意味の現人(うつせみ)とをかけて空蟬(うつせみ)と呼ぶ。地上に生まれたと同時に短期間で亡くなってしまいう蟬は、無常観を喚起するものの代表として、古来から文学の世界でも数々歌われている。抜け殻は、そこに実際に存在するが、中身は既に失われているものであり、そのものではなく対象が呼び起こす何かを象徴するものである。また、蟬は、種類に応じて独特な鳴き声で何かを訴えているようである。この作品では、ピアノのペダルの残響音、クラリネットの微分音、“間”などによる微妙な音色の変容により、消え去るものの美しさを表現しようと試みた。

*プロフィール(出演者プロフィール参照)

3. クラウディオ・ラステッリ：《変容 第3番》(2017)フルートとピアノの為の(日本初演)

1. Immagini (1-14; 16-20; 22-24; 26) 2. Continuum (15; 21; 25) 3. Divertimento (27; 28; 29; 30)

《ゴールドベルク変奏曲》と呼ばれるものの、バッハはVariationenではなくVeränderungenと呼び、変奏というより変化や変容を意としている。私の作品はVeränderungenとバッハの素晴らしい作品群の研究から生まれた。オリジナルから変化し、そこから再度変化して姿、形、色を変え、「新しい何か」になっていく。《変容 第3番》は3曲の中に《ゴールドベルク変奏曲》のテンポを変え、和声を変え、オリジナルの音の順番や曲の前後を入れ替えつつ、その全てを内包している。第1曲は23の変奏のイメージを抽象化し、思い出せないほど遠い記憶のようなテンポを保つ。第2曲は、3つの短調の変奏による。第15、第21変奏の二重対位法はフルートとピアノに分けられ、第25変奏の旋律で曲は終わる。宙に浮いているかのようなテンポで二つの楽器は同じ波に乗り流れてゆく。第3曲は、最後の4つの変奏の主要な要素を変化させ、発展させていく遊びの音楽である。

クラウディオ・ラステッリ(1963-) トーニに学ぶ。1991年以来、ヨーロッパ各国、北アメリカ、日本にて作品が演奏されている。イタリア国営放送 Rai3 から放送。現代音楽への理解を広めるべく、作曲のマスタークラスを始め、現代音楽の聴き方に関するセミナ

一などを音楽院、音楽大学や中等、高等学校などで開催している。2001年からは、モーデナの市立劇場との共同で若い世代を対象とした講習や演奏会を企画、運営している。モーデナの「音楽の友」協会会長を勤めている。

4. 一柳 慧:《パガニーニ・パーソナル》(1982) マリンバとピアノの為の

この曲を委嘱されたのは、指揮者として世間に認知されている故 岩城宏之氏であるが、彼は東京芸大の打楽器専攻に入学している(のち中退)。打楽器の中でも木琴に対する想いが強かったらしく、指揮者としての活動の他、機会があれば、打楽器リサイタルや、オーケストラを伴奏にした演奏会(名古屋フィルでも定期演奏会で、このパガニーニへのオーケストラ ver.を取り上げている)を全国で行っていたようだ(僕は一度しか共演の機会がない。その時はヴァイル、メシアン作品であった)。本日演奏するピアノとのエディションは、岩城氏のマリンバ、その夫人でもある木村かをり氏のピアノによって初演された。有名なパガニーニ作曲《無伴奏ヴァイオリンの為の24のカプリス》の終曲の主題をモチーフに、一柳氏らしいパッセージが展開されていく。所要所にバルトークの作品の影響(二台のピアノと打楽器の為のソナタや、アレグロ・バルバロ)も想起させられ、打楽器の使い方の一石を投じたバルトークに対するオマージュも感じられる作品となっている。岩城氏はこの曲を気に入っており、後に東京混声合唱団の演奏会で、歌詞をつけて取り上げたこともあり(歌詞は岩城氏によるもの)、業界では、もっぱら「マリンバよりピアノが難しい」ことで有名な曲であるが、本日の内本先生との初共演が頼もしく、楽しみである。

一柳 慧(1933-) ニューヨークのジュリアード音楽院で学び、60年代ジョン・ケージをはじめとするアメリカの実験音楽を日本に紹介する。尾高賞、フランス芸術文化勲章、毎日芸術賞、サントリー音楽賞、文化功労賞ほか、本年度、文化勲章を受賞し、日本を代表する作曲家の一人である。

= 2部 =

5. 山本 哲也:《…人生の色彩について》(2014) ヴィブラフォンの為の

2014年に打楽器奏者の會田瑞樹氏から、「エディット・ピアフの《バラ色の人生》の素材から再作曲した新作を、そして山本氏のバラ色の人生を歌い上げてほしい」と作曲の委嘱を頂いた。結果として具体的に人生についての何かを作品に込めたつもりはないが、作曲という行為そのものに自分の人生経験の一部が内包されていることは間違いない。本作では片手に3本ずつのマレットを持って演奏される。大部分は左右2本ずつの毛糸巻きマレットが使用されるが、両手の一番外側にプラスチックまたは金属製の硬質マレットを用い、音色の異化、アクセントの強調を担当する。楽曲のフォルム、旋律の上下動は原曲とほとんど同じで構成されており、実際の音の高さは原曲のルフラン(=サビ)から導き出した2種類の旋法を中心に選択されている。終盤に唯一モーターが使用され、ルフランの最後の4音が印象的に登場する。それまで継続していた無窮動的な音楽がびたっと静止し、ヴィブラフォンが本来持つドラマチックな音色、吸い込まれるような余韻に釘付けにされるクライマックスである。

山本 哲也(1989-) 国立音楽大学、同大学院を修了後に渡仏。マルセイユ地方音楽院を経て、現在リヨン国立高等音楽院に在学。これまでに作曲を川島素晴、北爪道夫、Rカンボ、P.ユレル、M.マタロンの各氏に師事。イル=ド=フランス国立管弦楽団主催の作曲コンクール「Ile de créations 2018」優勝、第38回 V.ブッキ賞国際作曲コンテストファイナリスト(2017)、第6回 A.D.ヴォルザーク国際作曲コンクール第1位および特別賞(2015)、日本現代音楽協会第27回現代作曲新人賞(2010)など、国内外のコンクールや作品公募において受賞・入選を重ねている。2018年5月にはラジオフランスの番組「Création mondiale」において自作を中心とした30分の特集が組まれた。日仏現代音楽協会会員。http://www.tetsuyayamamoto.net

6. パオロ・ロティリ:モンテヴェルディ「アリアンナの嘆き」より《もう一つの響き》(2018)

フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴットとピアノの為の(日本初演)

過去の音楽を振り返ることは今に始まった事ではない。自らのルーツを辿るため、または過去を断ち切るためかもしれない。過去の忘却に抗うことは現在に意味を与える。歴史は我々の奥深い内面に堆積し続ける。記憶を繋ぎ止めることによって「今」は意味を深める。現代の様々な機器は、過去の記憶を膨大に記録し続けている。遠い時間や空間は我々と共にあるとも言える。我々の中にある記憶は、時間や空間という枠組みを超えて交錯し、堆積していく。記憶を失わずにいることによって「今」が意味を持つ。過去を語ることで意味をなさないとしたら、我々の現在は、過去も未来もない水平線上の「可能性の認識」という無意味な存在となるであろう。

パオロ・ロティリ(1959-) サンタ・チェチリア音楽院(ローマ)に学ぶ。ラティーナ市の国立音楽院作曲科にて教鞭を執る。オーケストラ、音楽劇、室内楽など数多くの作品を作曲。ヨーロッパ各国、アメリカ、南アメリカ、カナダ、中国にて演奏された。ベルベン、エディン、スコプティナルテ、ポリッシュミュージックから楽譜が出版されている。

7. ガブリエ・タリエッティ:《意訳のノート(1)》(2017)

フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴットとピアノの為の(日本初演)

モンセラートの失い本からの5曲: 1.「輝ける星よ」 2.「おお、輝く聖処女よ」

3.「処女なる御母を讃美せん」 4.「声をそろえいざ歌わん」 5.「われら死をめざして走らん」

ある作品の内容を損なわずに意訳しようとする際、その作品と正面から向き合い、勇気を持って時間や習慣の鎧をそぎ落とし、その作品が生まれた頃に放っていたであろう光を再び輝かせる必要がある。編曲を行う際も同じく、元となる作品の持つ深い意味を捉える必要がある。今回、中世の名曲《モンセラートの失い本》に挑戦することにした。バルセロナ近郊のベネディクト派修道院所蔵の14世紀のポリフォニー音楽を集めたこの写本は、ナポレオンの兵士達による火事を奇跡的に免れた。この写本から単旋歌、多声歌を含む優しい聖歌や激しい死の舞踏など5曲を選び、6世紀を経てなお、これらの歌が我々へ向けて語りかける力に驚き、素晴らしく自由な創作力をそのままの姿に保つよう心がけた。現代の音楽との類似音を思い起こさせるようなショート回路を創ろうと努力したわけである。つまり、聞いたことのない音色、予期しない反響、分光する響き、迷路のような多旋律などを使って楽器による Hircocervus (頭はヤギで体が鹿の人物、存在しないものの喩え)を求めた。 *プロフィール(出演者プロフィール参照)

8. 伊藤 美由紀:《原始の復活》(2018) フルート、クラリネット、打楽器、ピアノの為の(世界初演)

2008年に日本で開催された「カルロ・ザウリ展」で彼の強烈な個性的な作風に圧倒された。今回の作品は、イタリア現代陶芸を代表する作家の一人であるカルロ・ザウリ(1926-2006)の3つの幾何学的な陶彫作品《原始の復活》にインスピレーションを得て作曲した。高温焼成による独自の釉薬「ザウリの白」や、コントロールされたうねり、ゆがみ、亀裂による荒々しい律動を感じる幾何学的な個性的な形態は、土という素材、自然の相貌を内面化し結晶化した結果であろう。また、土、自然への彼の想いは、焼き物の先進国である日本の美学に通じるものを感じさせる。この作品では、土に命を吹き込む生命力、律動感、繊細な「ザウリの白」の色彩を、管楽器の息、ピアノ、打楽器の残響を含んだ緊張感のある音色で表現しようと試みた。

* 1.邦訳:伊藤美由紀、2.6.7.邦訳:内本久美、3.8.伊藤美由紀、4.窪田健志、5.山本哲也

==出演者プロフィール==

●**窪田 健志(打楽器)**:1983年大阪生まれ。長野県上田高校を経て、東京藝術大学卒業後、同大学院修士課程修了。2002年東京佼成ウインドオーケストラ アジア公演を皮切りに、在学中より様々なオーケストラメンバーとしてシンガポール、チェコ、ドイツなどで演奏。日本管打楽器コンクール第2位。PMF、宮崎国際音楽祭、小澤征爾音楽塾オペラ公演などに参加。芸大フィルハーモニーと打楽器コンチェルトを協演。歌手 谷村新司と奈良、東大寺での演奏や、フジテレビ系列「のだめカンタービレ」出演、演技指導、CD録音など、活動は多岐に渡る。2010年(公財)名古屋フィルハーモニー交響楽団ティンパニ・打楽器奏者に就任。現在、首席奏者。演奏活動としては、オーケストラを中心に、室内楽、また打楽器ソロ・リサイタルを各地で公演を行う他、音楽之友社「バンドジャーナル」ワンポイントレッスン連載や、各コンクールの審査員なども務める。名古屋市民芸術祭ベスト・アーティスト賞、第23回青山音楽賞等を受賞。「くぼった打楽器四重奏団」「パーカッション・ギャラリー」「パーカッション・フォース」各メンバー。菊里高校音楽科、名古屋音楽大学の非常勤講師。趣味はタップダンス。

●**イカルス・アンサンブル**:1994年創立以来、イタリアを中心に、オランダ、ベルギー、イギリス、スイス、フランス、ドイツ、アイルランド、リトアニア、クロアツィア、アゼルバイジャン、ルーマニア、モルドヴァ、マルタ、北アメリカ、メキシコ、アルゼンチン)、エジプト、日本、タイ、各国で演奏活動を行なう。笈田ヨシ、ダニエレ・アバド、フランコ・モアナ、クリスチャン・ボルタンスキー、パチ・ダロなど著名な演出家や、アゴン、オトラブ、ファブリカ、ルカ・スカルツェツァ、テンポ・レアーレ、アルヴィーゼ・ヴィドリン他のサウンドディレクターやスターブラート・サウンドシステム(オランダ)やパン・ソニック(フィンランド)とのコラボレーションを通して、より新しい音楽を常に追い求めている。2012年には、EUからの支援を受け、ハッダースフィールド現代音楽祭(イギリス)、ニュー・アンサンブル(オランダ)との共同プロジェクトとして、20代の作曲家を対象としたマスタークラスと演奏会の企画・運営を行った。また、イタリア国内の10代の若手演奏家で構成されたイカルス・ジュニア・アンサンブルを立ち上げ、イタリア、北アメリカ、クロアツィア、エジプト、フランスでの演奏活動を企画、支援した。リコルディ、ストラディヴァリウス、ポッター・ディスカンテカ、シンクロニエ、アリストン、スパツィオムジカ、アンジェリカ各社からCDをリリース。

ジョヴァンニ・マレジーニ(フルート)、ミルコ・ギラルディーニ(クラリネット)、マルコ・ペドラッツィーニ(ピアノ)、内本久美(ピアノ)

●**ゲオルグ・シャシコフ(ファゴット)**:1978年ブルガリア生まれ。1988年よりワイマール国立音楽大学でゲオルグ・クルツィ氏に師事。その後、ケルン音楽大学に移籍。2005年満場一致の最優秀成績を得て、ディプロマを取得。2007年にドイツ国歌演奏資格を取得。これまでに、ハンブルク交響楽団、マレーシア・フィル、マーラー室内管弦楽団より客演として招聘される。第24回日本管絃打楽器コンクール第4位入賞、パイロイト国際コンクール木管楽器部門ファイナリスト(2001)、Paul und Helga Hohnenコンクール入賞(2006)、宝塚ベガ音楽コンクール入賞(2008)。2006年名古屋フィルハーモニー管弦楽団に入団し、現在は首席奏者を務める。

●**岡田 麗紗子(オーボエ)**:宮崎県延岡市出身。宮崎県立延岡星雲高等学校普通科を経て、2017年愛知県立芸術大学音楽学部器楽科管打楽器コース卒業。第36回全九州高等学校音楽コンクール金賞およびグランプリ賞受賞。2014年、2017年エルネスト・ロンバウト氏のマスタークラス受講。これまでに関水萌子、池田昭子、和久井仁、浦彦彦の各氏に師事。現在はフリーのオーボエ・イングリッシュホルン奏者として愛知県を中心にさまざまな演奏活動を行っている。

●**ガブリオ・タリエッティ(作曲)**:1955年クレモナ生れ。ミラノ音楽院で作曲をマンゾーニに、ピアノをベルトッキに学ぶ。彼の作品は、ユトレヒト(オランダ)、ボスヴィル(スイス)、ラジオ・フランス(パリ)、プラハ、東京などイタリア国内外で演奏されている。グイード・ダレツツォ賞(1988)、フランコ・エヴァンジェリステイ作曲賞(1989)、ザフレード賞(1990)など受賞。2001年には、リコルディから、室内楽作品集のCDがリリース。2006年には、メンデルスゾーンの未完成のソナタ楽章を完成し、ベルリン・フィルハーモニー・ホールで、ロベルト・ブロッセダにより初演される。ロベルト・シューマンの評論集、シェーンベルク/トーマス・マンの往復書簡などのイタリア語翻訳も行う。イタリア国立マントヴァ音楽院で教鞭をとる。

●**伊藤 美由紀(作曲)**:愛知県立芸術大学、マンハッタン音楽院修士課程修了後、コロンビア大学(ニューヨーク)で作曲をトリストラン・ミュライユに師事、博士号を取得。在学中、文化庁芸術家在外研修員として IRCAM(フランス国立音響音楽研究所)にて研鑽を積む。コロンビア・シンフォニエッタ(NY)、東京オペラシティ、ミュージック・フロム・ジャパン(NY)、アタックシアター(ピッツバーグ)、愛知芸術文化センター、Sinus Ton 音楽祭(ドイツ)などや、天羽明恵(ソプラノ)、加藤訓子(打楽器)、大矢素子(オンド・マルトノ)他、ソリストによる作品委嘱ほか、カーネギーホール(NY)、レゾナンス・フェスティバル(パリ)、ISCM 世界音楽の日々(香港)、国際電子音楽会議(マイアミ)、SMC(ギリシャ、スペイン)、Re:New(デンマーク)、Visiones Sonoras(メキシコ)、Foro 国際現代音楽祭(メキシコ)、アジア音楽祭(東京)をはじめ、世界各国の国際音楽祭で作品が演奏される。名古屋文化振興賞、日本交響楽振興財団作曲賞入選、フランコ・エヴァンジェリステイ作曲賞(ローマ)など受賞。また、ニンフェアール、JUMP(日米:新しい音楽の展望)主宰として自主企画公演を定期的に展開し、ニンフェアール第10回公演は、第14回佐治敬三賞受賞。《時の砂》がALCD80からリリース。執筆活動として、『音楽現代』に特集記事や公演批評を寄稿。メキシコのコンピュータ音楽雑誌『Ideas Sonicas』に自作品の分析論文(英語)が掲載。今まで、名古屋芸術大学、千葉商科大学、愛知県立芸術大学大学院、愛知県立大学、四川音楽学院(中国)などで、後進の指導にもあたっている。http://www.miyuki-ito.com



The Muramatsu
flute
since 1923

ひたすら、ハンドメイド。
つねに最高を求める技と心、
そして、フルートへの愛を込めて、
ムラマツは一徹です。

フルートを愛する人に、愛されるフルートを。
muramatsu

総発売元
村松楽器販売株式会社

東京都新宿区西新宿 8-11-1 〒160-0023
Phone 03-3367-6000 Fax 03-3369-1550

大阪市淀川区西宮原 2-1-3 〒532-0004
Phone 06-6394-6000 Fax 06-6394-5777

名古屋市千種区今池 5-1-5 〒464-0850
Phone 052-733-8822 Fax 052-733-5471

横浜市西区北幸 2-4-3 〒220-0004
Phone 045-328-4181 Fax 045-328-4182

<http://www.muramatsufute.com>



<http://korogi.co.jp>

異次元へ誘う響き。世界最高の音質。

New Spirits

SPN3000CG

C16-G83 5-3/5 Octave Marimba

定価 ￥ 1,970,000 (税抜)

洗練された優雅でスマートなフォルムと、
更に安定性を増した高さ調節機構



Concert Vibraphone PV2000GW

F33-F69 3 Octave Vibraphone

定価 ￥ 690,000 (税抜)

幅広の音板と共鳴管が奏でる力強いサウンド



Concert Marimba LV2400CF

C16-F81 5-1/2 Octave Vibraphone

定価 ￥ 1,490,000 (税抜)

抜群のコストパフォーマンスを誇るモデル
美しい木調フレームと、重厚な響き

KOROGI
marimbas & xylophones

株式会社こおろぎ社

TEL(0778)-34-2333
E-mail:front@korogi.co.jp
URL:<http://korogi.co.jp>

ネオリアこおろぎ

TEL(03)-5912-5880
E-mail:neoria@korogi.co.jp